

鎌倉時代の伊勢物語享受

—— 鉄心斎文庫本伝二条為氏筆伊勢物語の注記が語るもの ——

山 本 登 朗
とくろう

要 旨

鉄心斎文庫の伝二条為氏筆伊勢物語は、鎌倉時代の筆と考えられる現存最古の伊勢物語写本の一つであり、定家本勘物の存在や奥書から定家本の一つとされて重要視されてきたが、勘物以外に数多く見られる注記は、これまでまったく注目されてこなかった。実はそれらの注記は、同じく鎌倉時代の写本である天理図書館蔵伝為家筆本にも、ほぼ同じように付されているものであり、本文と同じく鎌倉時代にまでさかのぼるものと考えられる。勘物も含め百九十箇所にも及ぶ多量の注記は、注釈資料がほとんど知られていない鎌倉時代中・後期の伊勢物語の享受や研究の姿を垣間見せてくれる、貴重な資料である。

本論文では、まず独自の内容を持つ注記に注目し、その興味深い内容を検討した。さらに、定家勘物などを批判する注記が存在することに注目し、定家勘物の付された本を使いながら勘物を絶対視せず、また注記に対しても時に批判を加えるという、注記筆者の態度に注目した。さらに、無名の登場人物に特定の人物をあてはめる秘注的注記が一例だけ存在することに注目し、『毘沙門堂本古今集注』などの古今秘注の世界との関連を探り、あわせて清輔本『古今集』勘物に由来している注記にも注目して、六条家歌学との関わりも考え、最後に天理図書館蔵伝為家筆本の巻末に増補されている小式部内侍本文の性格にもふれた。

1 伝二条為氏筆伊勢物語とその注記

伝二条為氏筆伊勢物語（以下「鉄心齋為氏本」と呼ぶ）⁽¹⁾は、国文学研究資料館の所蔵となった鉄心齋文庫の伊勢物語写本を代表する一本であり、伝承筆者の名が示すように鎌倉時代の筆と考えられ、かつて重要美術品の指定も受けた、現存する最古の伊勢物語写本のひとつである。

卷末には「抑伊勢物語根源……」で始まる奥書が記され、その後定家の名も記されていることなどから、この鉄心齋為氏本は、山田清市氏⁽²⁾によって初期の定家本本文を伝えるものとされ、山田氏はこの本や後述する天理図書館蔵伝為家筆本⁽³⁾（以下「天理為家本」と呼ぶ）を「根源本第二系統」と呼び、定家本伊勢物語を考える上で重要なものとして注目した。

このようにこれまでも重要視されてきた鉄心齋為氏本だが、この本には、定家本としての勘物のほかに多くの注記が記されていて、その中にはさまざまな点で興味深い内容が数多く含まれている。これらの定家本勘物以外の注記については、これまでその存在が注目されることはまったくなかつたが、実はこれらのほとんどは、山田氏によって同じ「根源本第二系統」の伝本とされた天理為家本にも、まったく同じように記されているのである。⁽⁴⁾その天理為家本には、後述のように、これらの注記が本文と同時に書かれたことを示唆する部分も見られる。形態を異にするこの二つの鎌倉写本にほぼ同じ内容で記されているこれらの注記は、後の時代に書き入れられたものではなく、共通する祖本からそれぞれの経路を経て、本文と共に受け継がれ書写されたものであつた可能性がきわめて大きい。

鎌倉時代の中・後期から室町時代の前半には、大きな力を持つて広まった秘説的注釈であるいわゆる「伊勢物語古

注」以外には、伊勢物語の注釈資料はほとんど残されていない。鉄心齋為氏本と天理為家本の注記は、そのような時代ににおける伊勢物語の享受や研究の様相の一端を示す、貴重な、かつ興味深い資料であると考えられるのである。

2 動物と独自の注記

いま、鉄心齋為氏本に記された伊勢物語本文以外の記述を、定家本動物と思われるものも含めすべて数え上げると、あくまでも仮の整理だが、百九十近い数となる。それらの注記は、その形態や内容から、次の四種類に分けることができる。

- A 定家本の動物と思われるもの
- B 定家本動物以外の注記
- C 和歌の出典注記
- D 本文の訂正

Aについては、武田本や天福本の動物とほぼ一致していることからひとまず定家本由来のものと考えられるが、武田・天福の両本とさまざまに異なっているところもあり、どの部分がそれにあたるか、またその範囲がどこまでかについては、明確に確定しがない場合もある。

BはAに含まれない注記、すなわち定家本動物とは考えられない独自の注記であり、さまざまな内容のものが含まれている。以下、まずはBの代表的な注記を見ながら、その性格を探ってゆきたい。⁽⁵⁾

3 漢籍や漢字を用いた注記

①（初段「このをとこかいまみてけり」の注）

ものをのぞくを、かいまみといふ。垣間見之由也。或本云、かいまみしてけり、同事也。文選第十、登徒子好色賦、此女登牆闚臣三年至今未許。かきの間よりみる事、根源起自于茲也。

②（初段「かくいちはやきみやび…」の注、底本の剥落部を天理為家本によつて補訂した。）

相互施芳心由の詞也。物語にみやびをかはし給など云事は有好由也。書云、風流、フリウノミヤビカナル。

③（第三段「いにしへのしづのおだまき…」の注）

しづのをだまき、下女績。毛詩云、八月載績。苧たゞ手に巻を、しづのをだまきといふ

①②は、ともに初段に付された注記。①は、主人公が「かいまみ」する、すなわち「垣の間より見る」という初段の設定の「根源」が、『文選』の「登徒子好色賦」にあるとする注記で、他書には見られない内容である。「登徒子好色賦」は、隣家の美女が牆かきに登つて三年間宋玉を闚うかがつたにもかかわらず宋玉は相手にしなかつたと述べ、自分が好色でないことを作者宋玉が楚の襄王に訴えるくだりで、滑稽な語り口の文章である。女性が男性をのぞき見るといふこの滑稽な話を初段の源泉としてあげることが妥当かどうかには疑問もあるが、この「登徒子好色賦」は日本でも広く知られているものであり、また伊勢物語にもたとえば第六三段に、「つくもがみ」の老女が主人公をかいま見る場面があることを考えると、伊勢物語への影響がまったくなかつたとは言えないように思われ、この注記も示唆に富んだもののように思われるのである。

②は同じ初段の末尾に見える「みやび」という言葉の注。「相互施芳心（相互に芳心を施す）由の詞也」という説明はユニークで、他に見られないものである。その後「書云」として示されている「風流、フリウノミヤビカナル」という音訓を並べたいわゆる文選読みの訓読は、『遊仙窟』の「風流」の訓読にもくりかえし見られるものである。「みやび」の語義等については、天福本伊勢物語の巻末に、おそらく定家によると考えられる記述があり、また『袋草子』などには藤原清輔の「こびたることにや」等という説明が見えるが、この②の注記は、それらとはまったく異なっている。

③は第三二段の「しづのおだまき」についての注。ここでも『毛詩』（幽風）がことさらに持ち出されている。

本書の注記には、以上の三例の他にも、以下に列挙するように、伊勢物語の語句を漢字で書いたり該当する漢語を示したりするものが多く見られ、そこに、漢籍・漢語・漢字を通して伊勢物語を考えようとする、本書の注記の特徴の一つが見られるように思われる。

④（九段「すみたがはといふ…」の注）

須美太河。（頭部）

⑤（一五段「さるさがなきえびすごころを」の注）

さがなき、悪、サガナキ。えびすごころ、戎心。

⑥（一六段「これやこのあまのはごころもむべしこそ…」の注）

衣装、ミケシ。日本紀第廿二巻。あまのはごころも、天人羽衣。むべし、宜哉。むべなるかなと云詞也。みけし、君御衣と云詞也。

⑦（四三段「けしきをとりて…」の注）

気色也。
（傍記）

⑧（四三段「しでのたをさは…」の注）
志弓乃田長。

⑨（五八段「うちわびておちぼひろふと…」の注）
／落穂拾。
（頭部）

⑩（六九段「ついまつすみして…」の注）
続松、松明也。非続墨。

⑪（七一）段「すき事いひける…」の注）
数奇事。
（傍記）

⑫（七八段「しまこのみたまふ…」の注）
島也。
（傍記）

⑬（九五段「おぼつかなくおもひつめたる事…」の注）
思積也。
（「おもひ」の右に傍記）

⑭（九六段「秋かけて…多にこそありけれ」の注）
縁、えん。
（頭部）

⑮（一一七段「むつまじときみはしらなみづがきの…」の注）
美津垣。
（頭部）

4 その他の独自注記

漢籍や漢語と特に強い関わりを持たない注記にも、以下のように、独自の内容を持つものが多く見られる。

⑩ (第四段「ほいにはあらで…」の注)

本意歟。かんなの詞に、ほになくななどいふ常事也。兩字同心也。本意にはあらでと、たとへば執筆などにはあらで自然に見そめたる由也。

⑪ (第六段「あなやといひけれど…」の注)

あなや、凡俗痛事をあ痛やと云詞也。

⑫ (第一八段「えだもとををに…」の注)

とを、たわゝ共。是枝もたふくゆらくとみゆる也。

⑬ (第三九段「なをぞありける」の注)

猶也。ほむるよし也。実には、すこし平給歟。一世源氏のす多なれど、よおぼえ凡人とくだりにたれば皇子の本いなし。

⑭ (第六一段「名にしおはば…たはれじま…」の注)

たわれじま。たわれをとほ好色にあだなる男を云。是ヲ島の名によせて、たわれじまと云也。

⑮ (第六九段「かち人のわたれどぬれぬ…」の注)

歩人の渡れどぬれぬと書て出事、指て見たる所なし。只あるまじくありがたき事をすれど、させるとがもなし

といふ心ヲかすめて云歟。

②②（第七七段「めはたがひながら…」の注）

目はたがひなから、狂言也。目は失東西、けしきははりて眼あしきさまになりながら歌詠由也。

②③（第八一段「だいしきのしたに…」の注）

北対西対といふやうに、台じき、いたじき、ことごとしくいひなさんとてだいじきとかく。板とかく本もあれど凡俗也。

②④（第九六段「あまのさかてをうちて…」の注）

あまのさかて、至極の鬱積之心、天に祈由歟。あまは天歟。この事は、大に人を恋思深く不可思議の事かなと、手をはたとうちてあさましがりおどろく由の事に仕詞也。

②⑤（第一〇八段「かせふけばとはになみこす…」の注）

とはになみこす、とはとは、常磐、ときはと云也。ときはとは、常といふ也。不断に浪こすといふ詞也。とはにあひみんといふ歌も、あけくれあひみん事を思と之由也。

②⑥は、第四段の「ほいにはあらで」を「ほになく」という「かんなの詞」と同じ意味とするが、その後で、「本意にはあらで」を、「たとへば執智などにはあらで自然に見そめたる由」であると説く。正式な結婚によって賀として迎えられたのではなく、偶然に「見そめた」自由恋愛だったことを「不本意」と言っているのだという、きわめてユニークな解釈が提示されていて興味深い。

②⑦は、齋宮との密通を語る第六九段で、最後に齋宮から贈られた「かち人のわたれどぬれぬえにしあれば」という上の句について、水の上を徒歩で歩いてもぬれなかった、つまり、「（あなたと私は）禁忌を犯してしまつたが結

果的に何の問題も生じなかったから（また逢えるでしょう）」という意を「かすめて云駄」、すなわち、それとなくほのめかしているのではないか、としている。通説ではただ「あなたと私は」浅い縁しかなかったから（再び逢うことはできなかった）」という意に解していて、それが適切な理解かと思われるが、この注記に示された、他書に見られない独自の読みもきわめて興味深い。

また、②の注記に「目はたがひなから、狂言也」と注されている、その「狂言」という言葉が注意される。内容やことがらだけにとどまらず、表現のありかたにまで注意をむけ、伊勢物語のユーモラスな表現に注目しようとする読みの柔軟さが、そこには見られるからである。

③では、第八一段の「いたじき」「だいいじき」という本文異同が問題になっている。定家本の中でも武田本は「いたじき」、天福本では「だいいじき」となっていて、一定していない部分だが、それについてこの注記は、「ことごとしくいひなさんとてだいいじきとかく。板とかく本もあれど凡俗也」と述べ、「台じき」を、「ことごとしくいひな」した、つまり意図的に仰々しく述べた表現であるとする一方、「板敷き」という本文を「凡俗」と断定して否定している。これも他書に見られない、ユニークでかつ興味深い注記といえるだろう。

5 本文訂正の注記

次に、さきにDとした、本文の誤脱を訂正している注記にふれておきたい。この種の注記は数多く見られ、本書の書写がけつして慎重・厳密におこなわれてはいなかったことをうかがわせる。また、この種の注記は、当然のことだが同一の注記が天理為家本に見られることはない。両本はそれぞれ別個に書写の誤脱を生み、それぞれに訂正してい

るのである。⁽⁶⁾このような本文の状況と、数多く付けられたさまざまな注記を考えると、鉄心齋為氏本と天理為家本は、由緒正しい本文を伝える証本として慎重に筆写されたものではなく、本来伊勢物語を享受し研究するために書写された、ある種の実用的な目的を持った伝本であったように思われもする。

以下、まずは冒頭から第二二段までに見られるこの種の注記を列挙する。右側に掲げた伊勢物語本文は誤っており、それを訂正するために左の注記が付されている。

- ②⑥ (二三段 「…とふもうらめし」の注)
るさ 「うらめし」の「らめ」を見せ消ちにして傍注)
②⑦ (二六段 「なりたるころえゆくを…」の注)
と 「る」と「」の中間右側に)
②⑧ (二六段 「かくいひやりければ…」の注)
たり 「り」と「け」の間に補入記号○を書いて右に傍記)
②⑨ (二八段 「ありけり歌…」の注)
女 「り」と「歌」の間に補入記号○を書いて右に傍記)
③⑩ (二二一段 「おもひかひ…」の注)
ふ 「おもひ」の「ひ」を見せ消ちして右に傍記)
このように冒頭部だけでもかなり頻繁に記されている。次に、特に大きな本文の欠脱が訂正されている例を、全体の中から抜き出しておく。
- ③⑪ (六七段 「ひるはれたり（改行）それをみて」の注)

ゆきいとしろう木のすゑにふりたり (「そ」の上に補入記号○を入れ、右に傍記)

㉔ (七七段「えだにつけてだうのまへにうごきいでたるやうに…」の注)

だうのまへにたてたればやまもさらに (「て」と「た」の間に補入記号○を入れ、右に傍記)

㉕ (八七段「あつまりきにけりそのいゑの…」の注)

このおとこのこのかみもゑふのかみなりけり (「り」と「そ」の間に補入記号○を入れ右側に傍記)

㉖ (九六段「よくてやあらんにし所も…」の注)

あしくてやあらん (「あらん」と「いにし」の間に補入記号○を入れ右側に傍記)

6 鉄心齋為氏本の注記と天理為家本の注記

鉄心齋為氏本の注記と天理為家本の注記は、先ほどのCに属する注記を除けば、かなり正確に一致している。たとえば、次の例のように、「女」とあるべき所が「母」になっているという、一見してわかる単純な誤りまで、両者はそのまま共有しているのである。

㉗ (一九段「あまぐものよそにも人の…」の注)

古今第十五恋五、紀有常母 (頭部)

右のような例から、鉄心齋為氏本と天理為家本両本の注記は、まちががなく共通の祖本から伝えられていると知られるが、一方、両本の注記は、おおむね一致してはいるものの、同時にさまざまな異同を示してもいる。その中でも次に挙げるのは、注記全体が入れ替わっているという、特に顕著な異同の例である。

③⑥（九九段「むかし右近のむまばのひをりの日…」の注）

左近馬場、西洞院よりは東ひきいりたる所。

この本文の「右近」の「右」の字の右には、朱筆の長点を伴った「左」という傍記があるが、注記の冒頭は、その傍記に合わせるかのように「左近」と記されている。この注記は、天理為家本には見えず、天理為家本には代わりに、「真手結ヲ日ヲリトイフ也」という注記が同じ位置に記されている。このような大きな異同は他には見られないが、両本の注記には、さまざまな不一致も見られるのである。

それらのさまざまな異同を見ると、次のように、鉄心齋為氏本の注記の方がより本来の形を残しているように思われる場合が多く見られる。

③⑦（六段「これは二条の後の…」の注）

高子、元慶元年正月為中宮卅六。（傍注）

③⑧（九段「からごろも…」の注）

古今九、羈旅、古今二ハ、業平歌。集。（頭部）

③⑦の傍注の「高子」が、天理為家本の注記では「亭子院」となっている。字形の相似による誤認であろう。また③⑧の「古今二ハ」の「二ハ」は、ひらがなが基本の鉄心齋為氏本注記でもカタカナで書かれている部分だが、ここが天理為家本では「才八」（「才」は「第」の異体字）となっている。これも「二ハ」というカタカナ表記の誤認によるものかと思われる。このような例は他にも多い。

両本の注記の異同の中でも、次の例は特に注目される。

③⑨（九八段「むかし大きをとと…」の注）

忠仁公良房、天安元年二月十九日任太政大臣五十五、同四月十九日従一位、二年十一月十七日摂政、清和踐(祚)外祖五十六、貞観十三年四月十日内舍人二人左右近衛各六人爲隨身、帶狀資人卅人、年官爵准三后。

藤原良房の略歴を述べたかなり長大な注記だが、実はこれは定家本勘物と考えられるものの一つで、他の定家本にも見られるものである。ところが天理為家本の注記は「忠仁公良房」という人名の後にただ「伝略之」と記すだけで、「天安…」以下の部分はすべて省略している。この場合も鉄心齋為氏本の注記の方がより本来の形を残していると考えられるが、ここで天理為家本の注記は、定家本勘物を特に尊重することなく、「伝略之」として、その長大な部分を消去してしまっているのである。これは、天理為家本の性格を考える上で注意すべきことがらと言わねばならない。定家本勘物に関わるものとして、次の事例も注目される。

④〇 (二〇一段「むかし佐兵衛督なりける…」の注)

貞観十二年正月十三日参議五十三、廿六日右兵衛督別当、十四年八月廿九日右衛門督、十五年十二月八日従三位太宰権帥、元慶元年十月廿八日治部卿、六年正月十日中納言六十五、八年二月正三位三月民部卿、三品阿保親王第二子、奈良天皇二世娶桓武天皇女伊登内親王、生行平等、行平非内親王子如何、仁和元年二月按察、三年四月十三日致仕、寛平九年七月薨七十六。

右の注記は冒頭に「行平」の二字を欠くが、在原行平の官暦を述べたもので、勘物として他の定家本にも見られる。しかし、右の注記には、他の定家本に見えない「三品阿保親王第二子、奈良天皇二世娶桓武天皇女伊登内親王、生行平等」という部分が混入している。官暦はその上下で連続しており、なぜその途中に両親の記事が出てくるのか、よくわからない。しかもその混入部分の後に、朱筆(ここではゴチック)で「行平非内親王子如何」という、「伊登内親王、生行平等」という直前の記述に対する強い批判が記されているのである。批判の対象は他の定家本の勘物には

みえない部分であり、定家本勅物に対する批判とは必ずしも言えないが、このように注記を批判する注記が存在することは、鉄心齋為氏本の注記の性格を考える上で興味深い。

このような鉄心齋為氏本に対し、天理為家本の同じ部分には、朱筆ではなく墨筆で「民部卿行平非内親王子云々如何」と記されていて、この部分の両本の注記には、朱筆と墨筆の違い以外には、それほど大きな異同は見られない。さらに、本論冒頭でも述べたが、この長大な注記は、天理為家本では、通常は一面八行の本文をその面のみ特別に一面四行に減らし、大きく空いたその行間を利用して書かれている。すなわち、この批判の部分を含めた注記全体が、天理為家本では、本文の書写と同時に書写されたことが知られるのである。同様の形は他の箇所にも見られる。一方の鉄心齋為氏本ではそのようなことはなく、④の長い注記も、本文の行間に八行にわたって書き入れられている。

7 鉄心齋為氏本の注記と「伊勢物語古注」

注記を批判する注記としてはもう一例、次のような事例が注目される。

④（一〇三段「みこたちのつかひ給ける人を…」の注）

内舍人贈太政大臣清友也。

伊勢物語第一〇三段の「みこたちのつかひ給ける人」は、実は「内舍人贈太政大臣清友女」の娘だと、この注は言う。「内舍人贈太政大臣」の「清友」は、橘諸兄の孫、奈良麻呂の子で、嵯峨天皇の皇后嘉智子の父であった橘清友（天平宝字二年・七五八）延暦八年・七八九）のことと考えられる。「みこたちのつかひ給ける人」はその橘清友の娘だと、この注は言うのである。名を示されることなく登場している伊勢物語の人物について、実はこの人物であったと、そ

の実名を特に根拠もなく暴露するこのような注記は、いわゆる「伊勢物語古注」に数多く見られるものである。すなわちこの注記は、「伊勢物語古注」と同様の性格を有していると言わねばならない。このような注記は鉄心斎為氏本中に他には見られない。特殊な性格を持つ唯一の例として、この注記は注目されるのである。

ちなみに、橘清友の名は、『古今集』の「かはづ鳴く」の歌（春下・一二五）の左注の中に、次のように見える。

題しらず
よみびとしらず

かはづ鳴く井手の山吹散りにけり花の盛りに会はましものを

この歌は、ある人のいはく、橘の清友が歌なり。

④の注記は「伊勢物語古注」にきわめて近い性格を有していると述べたが、実際に「伊勢物語古注」に属する『和歌知頭集』や冷泉家流の古注とされる注釈を見ても、この第一〇三段の注記に「清友の娘」という名を記したものを見出すことはできない。たとえば『和歌知頭集』（島原松平文庫本系統）は、その伝本である『伊勢物語知頭集』の第一〇三段の注に「女は、そめどのゝきさきなり」とあるように、この女性を「染殿の後」としており、冷泉家流古注の代表的伝本である『十卷本伊勢物語抄』⁽⁸⁾は同じ段の注に「仁明第三皇子、光孝天皇ノ未ダ御子ノ時、小町ヲ思召ケルヲ…」と述べて、この女性を「小町」としている。冷泉家流古注のこの種の人名注記は諸本によつてさまざまだが、今のところこの第一〇三段の女性を橘清友の娘とする注は見出せていない。それだけでなく、この橘清友の名は、第一〇三段の注記にかぎらず、これらの「伊勢物語古注」のすべての部分に、今のところ見出すことができないのである。

ところが、その橘清友の娘の名は『毘沙門堂本古今集注』⁽⁹⁾の古注的注記の中に、次のように記されている。

（恋一・四九七・題しらず・よみびとしらず）

秋ノ野ノヲバナニマジリサク花ノ色ニヤコヒムアフヨシヲナミ

注、…此歌ハ、橘ノ清友娘ヲコヒテヨマセタマフ、惟喬親王ノ御歌也。…

（恋二・五七一・題しらず・よみびとしらず）

コヒシキニワビテタマシヒマドヒナバムナシカラノ名ニヤノコラム

注、…此ハ、清友ガ娘ヲ恋テ、藤原ノ良親ガヨメル歌也。

すでに指摘したように、⁽¹⁰⁾『毘沙門堂本古今集注』の後半部の注記は、『初雁文庫本古今集注』をはじめとする同類の諸注釈と、内容的に一致している場合が多い。事実、「橘清友の娘」という名は、『毘沙門堂本古今集注』だけでなく、『初雁文庫本古今集注』『鷹司本古今抄』『古今和歌集三条抄』など、同類の古注的（秘注的）注釈書にも共有されている。

父親である橘清友本人は、これら古注的（秘注的）古今集注釈書の注記の中に、いま実例は省略するが、たとえば『万葉集』に増補を加えて再編したメンバーの一人などとして、しばしば登場している。『古今集』の左注にその名が見える橘清友がこのように古注的（秘注的）古今集注釈書に名を使われていることは不思議ではないが、本人だけでなく、皇后嘉智子以外の「清友の娘」も、上記のように登場させられているのである。⁽¹¹⁾

鉄心齋為氏本の④の注記は、何らかの経路を経て、このような古注的（秘注的）古今集注釈書につながっているように思われるのだが、一方の天理為家本の注記は、この部分、まず「民部卿」と記した後で改行し、「此勅物何故哉。内舍人贈太政大臣正一位清友女也。或本ニハ」と記されている。最初の「民部卿」と最後の「或本ニハ」はこれだけでは意味不明だが、注目されるのは、鉄心齋為氏本の④の注記に該当する部分の前に加えられた、「此勅物何故哉」という記述である。これは、納得のいかない勅物について、その理由が分からないと疑問を呈して批判している記述の

ように思われる。すなわち、天理為家本の注記を記入したある人は、なぜ第一〇三段の「みこたちのつかひ給ける人」が清友の娘とわかるのか、その根拠が疑問であると、「内舍人贈太政大臣清友女也」という古注的注記に対して異義を申し立てているように思われる。さきに鉄心齋為氏本の注記の方が本来の形に近い場合が多いと述べたが、ここもある意味でその一例であって、鉄心齋為氏本の方がただそのままに書写している注記に対して、天理為家本の注記筆者は疑義を呈し、批判を加えていると考えられるのである。

8 鉄心齋為氏本の注記と清輔本「古今集」勘物

最後に、これまでほとんど触れなかった、C和歌の出典注記に注目したい。これらはすべて和歌の頭部に記されていて、天理為家本とも若干の異同はあるがほぼ一致している。その中でまず注意されるのは、多くの和歌の出典として、「業平集」が挙がっていることである。次のように最初の例では「業平集」と明記されているが、二例目からはすべて「集」または「同集」と略称されている。

④② (一段「かすがのの…」の注)

新古今、第十一、恋歌。業平集。(頭部)

④③ (四段「月やあらぬ…」の注)

古今恋、業平。集。(頭部)

在原業平の歌集「業平集」は、『古今集』や伊勢物語等から和歌を抜き出して編集したもので、現存本は次の四つの系統に分けることができる。⁽¹²⁾

(二) 歌仙家集本系統、(二) 西本願寺本系統、(三) 在中將集、(四) 宮内庁書陵部御所本

右のうち、現存伝本の多くは(一)と(二)に属するが、その(一)歌仙家集本系統は歌数四六首、(二)西本願寺系統は五人首であつて歌数が少ないのに対し、孤本である(三)在中將集は八二首、同じく孤本の(四)宮内庁書陵部御所本は本体部六八首に二種の増補部三四首を加えて計一〇二首と、歌数が多い。

いま鉄心齋為氏本注記で「業平集」「集」と記されている和歌を見ると、その多くは右の四系統のすべてに見られるが、中には次のように、(三)(四)の二本にしか見られない歌も含まれている。

④④ (二〇段「みよしのゝ…」の注)
／集。(頭部)

④⑤ (二〇段「わがゝたに…」の注)
／同集。(頭部)

④⑥ (四五段「ゆくほたる…」の注)
／後撰第五。／集。(頭部)

そして次の歌は、(四)の本体部のみあつて、他の三系統には見られない。

④⑦ (八七段「あしのやの…」の注)
／新古今、第十七、雑哥、業平。／集。(頭部)

そしてさらに、次の「うきながら…」の歌は、現存する四系統のどれにも見られないのである。この注記に誤りがないとすれば、鉄心齋為氏本注記の付注者は、現存諸本とは異なつた「業平集」を見ていたことになる。

④⑧ (二二段「うきながら…」の注)

以上、「業平集」の入集注記に注目したが、それ以上に注目されるのが、次の二つの注記である。

④⑨（四三段）「ほととぎすながなくさとの…」の注

／＼古今、第三。猿丸集、詞云、あだなりける女にもいひそめてたのもしげなきことをいふほどにほととぎすのな（は）とあり。

⑤⑩（六五段）「おもふにはしのぶる事ぞ…」の注

／＼此歌、有延喜御集、詞云、まだくらゐにおはしける時御めのとこの宣旨のきみいろゆるさせ給とて

④⑨の出典注記には「猿丸集」が、⑤⑩の注記には「延喜御集」が、それぞれ出典として掲げられているのだが、この二つの注記は、実は清輔本『古今集』の頭注（勘物）に依拠している可能性が大きいと思われる。清輔本『古今集』には、この二首の頭注部に、次のように記されている。⁽¹³⁾

（一）ほととぎすながなくさとの…の歌…『古今集』夏・一四七・題しらず・よみびとしらず

清輔本勘物：猿丸集、詞云、あだなりけるおんなに物をいひそめて、たのもしげなきことをいふほどに、ほととぎすのなきければ

（二）おもふにはしのぶる事ぞ…の歌…『古今集』恋一・五〇三・題しらず・よみびとしらず

清輔本勘物：此歌、在醍醐御集、詞云、だいにのみかど、まだくらゐにおはしましける時、御めのとこのせじのきみにいろゆるさせ給とて

若干の異同はあるが、鉄心齋為氏本の注記④⑨⑩が、この清輔本『古今集』の勘物に由来していることはほぼ明らかであり、その事情はもちろんで、天理為家本の注記についても同じである。すなわち、鉄心齋為氏本と天理為家本の祖

本の注記を記した人物は、清輔本『古今集』勘物に由来する注記を参看していたことが、これによって知られるのである。

8 鉄心齋為氏本の注記から天理為家本へ

鉄心齋為氏本の注記と天理為家本の注記が、異同もあるもののよく一致していることをさきに確認し、いくつかの異同例もみたが、実はそこでは挙げなかった大きな異同が、両本の注記には存在する。天理為家本の第四〇段に記された次の注記は、鉄心齋為氏本には見えないのである。

・（第四〇段「しんじちに…」の注）

イ本、ま（こ）とに。 （傍記）

・（第四〇段段末の注）

イ本、女かへる人につけて〇、いつくまでをくりはしつと人とはばあかぬわかれのなみだがはまで、とあるをきゝて、おとこはたえいりにける。

この二つの注記は、ともに「イ本」本文を示したもので、鉄心齋為氏本には見られない。そして、この「イ本」の本文を有しているのは、広本系と呼ばれる大島本、神宮文庫本、阿波国文庫旧蔵本などであって、そのうちの大島本（国立民族学博物館本）は、顯昭本とも呼ばれ、六条家とゆかりの深い本と考えられている。⁽¹⁴⁾

本論は鉄心齋為氏本の注記を中心に考えようとしているのでこれまで触れなかったが、天理為家本の巻末には、大島本巻末の増補部とも一部共通する、小式部内侍本の本文と思われるものが増補されていて注目されている。⁽¹⁵⁾ いま詳

述は避けるが、その巻末の大量の増補部は、さきに見た第四〇段注記の「イ本」にあたる本の巻末に付載されていた小式部内侍本（朱雀院塗籠本）の本文が、巻末に記されたものではないだろうか。第四〇段注記と巻末増補部は一連のものであり、巻末の増補は、天理為家本の本来の伊勢物語本文になかった異本の本文が、一種の注記として記されたものであるように思われる。鉄心齋為氏本には見えない要素だが、それらは天理為家本、ないしはその祖本に至って新しく加えられた、伊勢物語研究の成果、それも六条家由来のものから学び取られた成果だったように思われるのである。

以上、鉄心齋為氏本の注記を、天理為家本の注記も参照しながら検討してきた。両本の注記には、少量ながらきわめてユニークな解釈や独特の説明を含んだものも見られ興味深かったが、その注記の中に「伊勢物語古注」の秘注的注釈に似通った姿勢で記された注記が見られ、また清輔本『古今集』に由来すると思われる注記も見出されて、その多様な姿が注目された。両本の注記は、共通の祖本から本文と共に、それぞれの経路で伝来してきたと考えられる。鉄心齋為氏本や天理為家本を考えるにあたっては、本文だけでなくこれらの注記の性格もあわせて考えることが必要であろう。この両本は、その本文や注記、そしてここでは触れなかった奥書も含めたその総体が、鎌倉時代中・後期において享受され研究されていた伊勢物語の姿を、そのままに我々に示しているのである。

〔注〕

(1) 国文学研究資料館〔九八―一〕、列帖装一帖、一六・〇×一五・五センチ、第一二一段の途中から第一二三段の途中にあたる一丁が切り取られている。

- (2) 山田清市氏『伊勢物語の成立と伝本の研究』（一九七二年・桜楓社）
- (3) 『天理図書館善本叢書・伊勢物語諸本集一』（片桐洋一氏解題・一九七三年・八木書店）
- (4) 天理為家本の付注はカタカナで記されている。この天理為家本の付注もこれまでほとんど注目されていないが、『伊勢物語に就きての研究 補遺・索引・図録篇』（一九六一年・有精堂）で大津有一氏は「こうした定家本の勘物といわれるもののほかに、種々の注記がある」として若干の例を挙げ、その後「これは誰が加えたかわかっていない」と記している。
- (5) 以下、注記の翻刻にあたっては濁点と句読点を加え、表記を一部改めた。長点（ \sim ）とゴチック体の文字は、原本ではすべて朱筆で書かれている。なお、付注箇所として示している伊勢物語本文は、仮名遣いも含め鉄心齋為氏本に従っている。
- (6) 天理為家本の本文に欠陥が多いことは、注3の片桐氏解題でも指摘されている。
- (7) 『伊勢物語古注釈大成』第二卷（二〇〇五年・笠間書院）による。
- (8) 『伊勢物語古注釈大成』第一卷（二〇〇四年・笠間書院）による。
- (9) 『中世古今集注釈の世界 毘沙門堂本古今集注をひもとく』（人間文化研究機構国文学研究資料館編・二〇一八年・勉誠出版）所載の翻刻による。
- (10) 『中世古今集注釈の世界 毘沙門堂本古今集注をひもとく』所収の、山本登朗「複合体としての『毘沙門堂本古今集注』―その性格と成立―」参照。
- (11) 伊勢物語一〇三段の「ねぬるよの…」歌は『古今集』所収歌（恋三・六四四・人に逢ひてあしたによみてつかはしける・業平朝臣）だが、『毘沙門堂本古今集注』『初雁文庫本古今集注』ではこの歌に注記はなく、『鷹司

本古今抄』『古今和歌集三条抄』では相手の女性を「小野小町」としている。

(12) 『新編国歌大観』（角川書店）「業平集」 解題（片桐洋一氏執筆）等。

(13) 昭和三年（一九二八）刊・尊経閣叢刊『古今和歌集 清輔本』（前田本）による。

(14) 注3の片桐氏解題、および久保木秀夫氏『伊勢物語』天理図書館蔵伝為家筆本をめぐって』（『汲古』六〇号・二〇一一年六月）等参照。

(15) 注4の天津有一氏『伊勢物語に就きての研究 補遺・索引・図録篇』等。

The Reception of *Ise-monogatari* in the *Kamakura* period.

— The messages that the annotations of
Ise-monogatari carry. —

YAMAMOTO, TOKURO

The *Ise-monogatari* that has been said to be transcribed by *Nijō Tameuji*, the one reserved in the *Tesshinsai* Collection, is one of the oldest of the existing manuscripts assumed it was transcribed during the *Kamakura* period. Because of glosses (*Kanmotsu*) on the *Teika-bon* manuscripts and by the colophon, it has been regarded as important as one of the *Teika-bon* manuscripts. However, the other numerous explanatory notes that are attached to *Ise-monogatari* have not been treated as valuable as the glosses at all. In fact, those notes are attached in the same way to the books that has been said to be transcribed by *Tameie* (*Tenri* library), the other manuscript transcribed during the *Kamakura* period. Thus, those notes are considered to trace back to the *Kamakura* period just like the main texts. The 190 pieces of those notes attached to both manuscripts are valuable materials that glimpse of the reception and the research on the *Ise-monogatari* during the *Kamakura* period.

We spotted that there was only one example of *Hicha-chuki*, applying a specific person to an unknown character. So, we investigated the relation with the world of *Kokin-hichū* such as *Bishamondō-bon Kokin-shūchū*, etc. Together, we pointed out the notes relying on *Kiyosuke-bon Kokin-shū* and discussed over the relation with *Rokujōke-kagaku*. Finally, we briefly mentioned upon the characteristics of the body of *Koshikibu-no-naishi-bon* that was supplemented at the end of the books that has been said to be transcribed by *Tameie* (*Tenri* library).